相模経済新聞　2020年6月10日号

# 宇宙生命哲学 ことはじめ

25

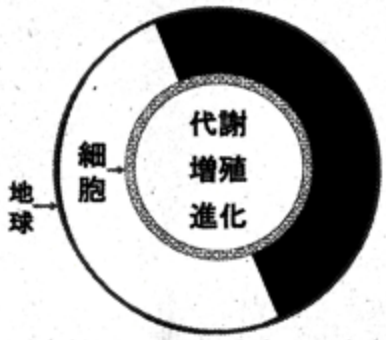
北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

## 生命とは何か

今回は、コロナウイルスとの関連で、パラサイト（寄生生物）を切り口に、人間社会の現状を考えてみたい。生命とは、自己と他者を区別する空間を持ち（細胞）、代謝を行い（酵素タンパク質）、増殖し（遺伝情報）、進化する（環境との関係）ものと定義されている。

ウイルスは、普段は粒子（物質）として存在するが、一旦生細胞に感染すると目を覚まし、生細胞の環境を利用して代謝し、増殖し、進化する。いわば、生細胞に寄生するパラサイトのように振る舞う。膨大な種類のウイルスは、細菌、植物、動物など、あらゆる生物に寄生しながら、生物と同様な活動を行い、人類の進化にも大きな役割を果たしている。

地球上での生命の循環を考えると、まず植物が、二酸化炭素、水、ミネラル、太陽光を使って様々な栄養素を作る。動物は、植物が作った栄養素を食べ、食物連鎖の中で豊かな栄養素の世界を構築する。生命現象全体としては、動物は、植物のように無機物から栄養素を作ることができないので、植物に依存するパラサイトと考えることができる。人類は、そのパラサイトの頂点に立ち、動物、植物、微生物が作り出す栄養素を思いのままに食べている。人類は、様々な工夫を凝らし、情報を共有し、文明社会を作り出した。しかし、パラサイトの宿命として、己が富裕になればなる程、権力を手にすればする程、不安にかられ、疑い深くなり、満足することがなく、動き回り、争い合い、常に怯えている。



地球環境に依存して生息する生命体

一方、植物は一旦地上に根を下ろすと、生涯その地を離れることなく、圧倒的な尊厳を持って生涯を終える。植物によっては、数千年の生涯を全うするものもある。しかし、植物といえども、地球環境に依存しなければ生きてゆけない。換言するならば、地球上のすべての生命は、完全に地球環境に依存したパラサイト集団である。

この集団の中で、人類だけが、自己保身のために地球環境を破壊し続け、今や生活環境を宇宙にまで広げようとしている。しかし、人類が生息できる場所は、地球以外に存在しない。人類は、今回のコロナパンデミックを経験して、自らが築いた社会が如何に脆弱なものであるか身を以て知ることになった。人類は、より進化した生命観のもとに、母なる惑星の水先案内人となって、持続可能な生活環境をこの地球上に作らなければならないと思う。